「50（フィフティ）いまの経済をつくったモノ」



著者：ティム・ハーフォード
訳者：遠藤　真美
出版：日本経済新聞出版社
発行：2018年９月21日

本書は、「紙」「バーコード」「知的財産」「文字」など、50の発明をとりあげ、世界経済はどのように動いているのか、その知られざる物語にスポットを当てている。人類の歴史を振り返ると、新しいアイデアや新しい技術の誕生、イノベーションは、直接的な効果以上の副作用を周囲にもたらしていることに気づかされる。

たとえば、冒頭に取り上げられている「プラウ（犂）」の発明によって、私たちは余剰食料を生産できるようになり、みんなが食料を探し求める狩猟採集の生活から解放されることになる。そして、一人の働きで何人もの食料が確保できるようになると、階級社会が生まれ、宗教家や政治家、軍隊といった支配者も生まれた。プラウ（犂）は、ただ単に農業にとって便利だっただけでなく、現代社会そのものの誕生に大きく貢献した道具だったのである。このように、新しいアイデアの誕生は、私たちの生活に予期せぬ影響をおよぼすのである。

50の発明の中には、「プラウ（犂）」のように単純きわまりないものもあれば、「時計」のように驚くほど精密になっているものもある。「コンクリート」のように重くて硬いものもあるし、「有限責任株式会社」のように、手で触ることのできない抽象的な発明もある。「iPhone」のようにとてつもない利益を生んでいるものもあれば、「ディーゼルエンジン」のように、最初は商業的に大失敗したものもある。しかし、すべての発明の一つひとつが、この世界がどのように動いているのか、私たちに大切なことを教えてくれるし、日々の生活の中、それもごくありふれたものの中にある奇跡に気づかせてくれる。

本書の目的は、経済に影響を与えた大発明ベスト50を選ぶことではなく、重大発明をカウントダウン形式で紹介するリスト記事の書籍バージョンでもない。それは「コンピュータ」という定番が、この本には入っていないことからもうかがえる。これは、「コンピュータ」の影を薄くしたいのではなく、むしろ光を当てたいと著者は述べている。だから、「コンピュータ」そのものではなく、「コンピュータ」を今のように多目的に使えるすばらしいツールにした発明群を見ていくことになる。人間と「コンピュータ」のコミュニケーションがぐっと簡単になったのは、グレース・ホッパーが「コンパイラ」を発明したからであり、電子商取引を安全に行えるのは、「公開鍵暗号」があるからである。そして、ワールド・ワイド・ウェブ（WWW）で有益な情報を見つけられるのは、「グーグル検索アルゴリズム」のおかげなのである。

著者はこうした物語を調べていて、いくつかのテーマが繰り返し現れることに気づいた。新しいアイデアが生まれると、経済の力のバランスが変わって、勝者だけでなく、敗者も生まれることが多い。そして、経済に変化が起きると男性と女性の関係が変わるなど、私たちの生活に予期しない影響が及ぶことがある。さらに、プラウのような発明が生まれると、筆記、所有権、化学肥料など、さまざまな発明が新しく生まれる可能性が開ける。

そこで、発明の物語をテーマごとに分けて、それぞれに解説を加えている。そして最後に、一連の教訓をまとめて、今日のイノベーションとどう向き合うべきかを問う。新しいアイデアが生まれるようにするには、どうするのがいちばんいいのか。新しいアイデアがどんな効果をもたらすかをどうやって見極めるのか、そこから未来を見据えて、プラスの効果を最大限に高め、マイナスの効果を最小限にとどめるには、どうすればいいのかがまとめられている。

起業教育研究会 企画委員
奈良県立五條高等学校
進路指導部長　谷口達之輔